

平和旬間 2017 隔ての壁を取り壊す
～社会と教会・自分との壁をなくすには～

オリビエ・シェガレ神父講話
桐生・フランシスコの家

今日はたくさん来ていただいて本当に心から感謝しています。平和旬間ですから平和について考えます。平和についてみなさんと一緒に学ばせていただく機会が与えられて、本当にありがたいです。暑いですので、終わりまでみなさんが我慢できるかな？終わりまで私ももてるか不安ですが、頑張っていきましょう。

今日のテーマは先ほど言われたのですが、「隔ての壁を取り壊す」～社会、教会、また自分の中にある「隔ての壁」をなくすには～ということになります。そして聖書のキャッチフレーズである「疲れたものは私のもとにきなさい」という言葉を心に留めながら、私が考えたことを分かち合っていきたいと思います。

「隔ての壁を取り壊す」というのはエフェソの手紙の引用ですが、聖書関連の箇所をプリントしましたので、時々、それを参考にいたしますけれども、それを手にもっていただいて、もう一度引用されている全文を確認しましょう。2章の14節は「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊しました」となっています。原文にあるのは「敵意という隔ての壁を取り壊す。」「敵意」が込められているという意味の壁ですね、すなわち分断と排除の壁です。特に困った人、小さい人たちを排除している壁。このような壁は分断と排除、憎しみの壁となって、平和を脅かしている壁です。もちろんすべての壁は必ずしもそういうものではない。良い壁もありますね。みなさんのお家に壁があるでしょ。なければ困りますね。人間にとって良い方の壁もあります。昔の町に城壁があって、市民が守られていて、安心していました。その意味の壁は分断と排除の壁ではありません。ですからすべての壁を取り壊す必要ないので安心してください。どの時代でも敵から人を守るための防衛措置があります。ただ最近では特に21世紀になってから、このような壁はただの防衛の壁ではなくて、敵意の隔ての、分断と排除の壁として作られ、悪い意味の壁です。平和を保つにはそのような壁をとにかくこれからとり壊さなければなりません。それは私たちの使命、課題です。

最近世界中で取り壊すべき隔ての壁が急激に増えている。1989年、ベルリンの壁の崩壊後、国と国の間に建設された隔ての壁は24（合わせて4万キロ）ほどあるそうだが、このような「壁」は「一部の人を守るため」という名目で作られているが、実際は多くの人々にとって分断と排除の壁となっています。教皇フランシスコはメキシコの壁の建設を公約にしたトランプ大統領に対して「橋ではなく壁を構築することのみを考える者は、キリスト教徒ではない」と猛反対の声をあげている。

現在世界に浸透して大きなインパクトがある三つの新しいイデオロギーはこのような壁の建設を助長していると考えられます。一つは最近の新聞に話題になっている非常に歪んだタイプの「ポピュリズム」（大衆主義）です。これを唱えている人々は、大衆の味方になってエリートの支配的な壁を取り壊す狙いがあった従来のポピュリズムと違って、「新興エリート」とされて、人権のために戦う市民団体の人々と彼らを支援する「エリート・マスコミ」の新聞記者を告発し、その声を消し、代わりに被害者とされている富裕層の人々の富を守るという。そのために一般の人々の不安を煽り、偽りのニュースを流し、嘘を平気で使って、仲介の力を無視して、ヘイトスピーチを持って恨みの感情にアピールする。

次のイデオロギーは最近話題になっているアメリカの白人至上主義事件に見られるような、特定の価値観を肯定するあるグループに自分たちのアイデンティティーを見出そうとする人々のイデオロギーです。その人たちは「キリスト派白人」とか日本なら

「大和精神派」とかに自分のアイデンティティーを見出し、所属している派とグループはすべてであるということにし、同じグループに所属しない人は排除してもいいというイデオロギーを持っています。残念ながら人生の道しるべと自分たちのアイデンティティーを失いつつある多くの若者がそれに共鳴して過激化してします。

三つ目のイデオロギーは似たようなもので自国第一主義を唱えながら、自分の国を守る大義名分の下に国境の閉鎖や移民の排除を求める安全至上保障主義です。安倍さんの答弁や発言を聞くと、守るという言葉がよく出ています。私は国民の生活を守る、平和を守るという、守ると言いすぎですね。日本だけではなく、フランスとアメリカも同じですね。守るのは小さい人々ではなく、富裕層の人たちの財産です。生活保護主義ということばが流行っているが、大抵一部の人々の生活を守る意味で、他の人はどうでもいいという意味の主張ではないかと思います。

政治だけではなく今ご存知のように宗教も排除と分断の壁を作っていることが多いです。イスラムだけではなく多くの宗教団体の原理主義が世界中に蔓延り、宗教対話を否定して、人々の間に大きな壁を作ります。日本も例外ではない。安倍政権を支えていて、「憲法改正」「教育基本法改正」、「靖国神社参拝」、「よりよい教科書を子供たちに」という右翼団体が入っている日本会議という役員の3分の一以上は宗教関係者だそうです。日本会議はきわめて宗教の色が強い団体であるということがわかります。今の日本では、宗教はあまり話題になっていません。宗教は怖いからでしょう。宗教を語ると、問題が起こりそうなので、親は子供に宗教がいいけれども関わらない方がいいとかいいます。そのためか宗教は表に目立たないが、見えないところで様々な原理主義的なグループが動いているようです。

日本社会の縮図であると言われる教会の中にも例外なく隔ての壁があるのは皆の実感ではないか。開かれた教会という80年代の夢は薄れてきて、外の風を入れずに窓を閉め、本心をなかなか出さないという「ニコニコ」の壁などのため、共同体の活性化と意思の疎通が困難です。また教会は依然として外の人にとっては敷居が高く、門が叩きにくく、通じない言葉や決まりは多くの人にとっては入れない壁となっている。

壁が増えているこうした状況の中で、戦争がないということだけは、果たして平和という神の賜物が生かされて、世界は安全と言えるだろうか。明日突然トランプ大統領は誰とも相談せず「北朝鮮の爆撃を決めた、Let's America be great again!」というようなツイッターが打ち出されるかもしれない。

では平和の使者としてこの世に派遣されている私たちのミッションはなんだろうか。まず逃げないで現実を見つめ、時代のしるしをきちんとわきまえることでしょう。そして教皇が主張しているように私たちに与えられた一番重要な役割は橋渡し役、冷静な仲介役を果たすことではないかと思います。カトリックは仲介と仲裁を大切にしている宗教です。イエスが仲介者として神と人々の間に常に立っている宗教。キリスト教の教えでは人間と神の間に直接なコミュニケーションはありえなくて、神と人の間に必ず媒介があり、それはキリストの言葉であり、教皇と司教の教導職制であり、目に見える秘蹟などです。そういうような媒介がない宗教は必ず原理主義化して、暴力を振るい、戦争のタネとなります。キリスト教は神と人の間、また人と人との間に特に媒介としての言葉の力を重んじる宗教だ。敵意に満ちた隔ての壁が増えている現代社会にあって、教会はキリストにならって、憎しみ合って敵対している人々の間に入り、仲介役を果たし、話し合いの場を提供し、時々国々の間に立ち会って調停役を果たすことがあります。今の時代ほどに、平和の実現のために派遣された教会は政治家の嘘を暴いて事実を確認し、時間をかけた対話のプロセスを尊重し、反省とゆるしを訴える使命が大切です。

しかしたとえ教会が頑張っているとしても、一人一人の平和へのコミットメントがなければ、皆の間に平和への取り組みの意欲が広まらないでしょう。まず自分自身の中にある隔ての壁に

気づき、それを取り壊して、「平和の使者」となるのは私たち一人一人の使命であります。自分の心にある隔ての様々な壁に、例えば人に対する思い込み、プライド、恐怖心、恥、無関心の壁に気づいていくことが大切。“壁”は相手を作っているのではなく、ほとんどの場合は私自身が作っているという自覚を持つのは大切です。

自分の心に潜んでいる壁を取り払う最も効果的な福音的な実践は隣人愛だと思います。この隣人愛の実践は実に二つの意味があります。一つは遠いと思われる人に対して隣人になること。隣人は近い家族や人種の人ではなく、地域的や身分的に遠いと思われる他者です。その人に近づいて、「隣人になろう」とするのは隣人愛です。もう一つの意味は他者、特に小さき人にとって、自分自身が近づきやすい（アクセスしやすい）隣人となることです。イエスは近寄りたがった救い主のポーズを取らずに、皆と一緒に酒を飲み、罪人の食卓にあずかり、距離をなくして、周りの人にとって近づきやすい隣人となって下さった。私たちの隣人愛も、イエスに倣って、共感と痛みの共有から始まり、自分の中にある壁をなくしつつ、相手を受け入れる愛です。善きサマリア人はたまたま道で出会った人を見て心が動かされて、怪我人を抱きしめ、癒しの油を塗り、その後宿泊のことも考え、倒れた人を徹底的に受け入れました。人を受け入れるのは頭の問題だけではありません。受け入れる姿勢も自分に身につけるような、感受性の問題でもあります。日本のキリスト教は真面目で型苦しいという評判があるが、人を受け入れる感性のトレーニングはもっと必要ではないでしょうか。

平和の人「普遍の兄弟」Universal Brother になろうとしたシャルル・ド・フーコーという聖人がいる。彼が隣人愛を徹底的に実践しようとして、「すべての人々の兄弟になる」と同時に「すべての人々に近い兄弟として感じられる」人になるように努めた。彼は1901年司祭に叙階され、サハラ砂漠の地で小さい礼拝堂を建て、最も貧しい遊牧民と共に生活を送り、「普遍的な兄弟」となることを目指した。私たちはサハラまで行けないかもしれないが、彼の精神を持って生きようとしたら、憎しみと排除の壁を取り壊すことができ、神の賜物である平和を受け入れられ、世界の平和に少しでも貢献できると思います

最後に、今日のテーマにつくキャッチフレーズ「重荷を負っている人は、わたしに来なさい」（マタイ 11, 28-30）という言葉を楽しみたい。平和の主であるイエスは人々を裁くためではなく、人々の重荷を背負うためにきました。イエスに習って私たちも人を裁かないで、人々の痛みを背負っていこうとすれば、私たちの間にある壁が取り壊されるようになります。

講話の要約となりますが、平和の使者であるイエスの弟子は人の間に入って仲介役を果たし、閉ざされた門を開け、世界の人々の隣人となり、人の重荷を背負うことによって隔ての壁を取り払うことができると信じています。これで講話を終わらせていただきます。皆さんどうもありがとうございました。